

入選

親切があたりまえの世の中に

東京都 新宿中学校 3年 菅野 光紗

去年の秋の雨の日のこと。学校が終わり、私はいつものように下校しているところだった。家の近くまで来たとき、カサをささず、塀に手をつき、しゃがみこんでいるおばあちゃんが目に飛び込んできた。こんな雨の中、カサをさしていないことが気になって、

「大丈夫ですか？」

と声をかけてみた。そうすると、

「足を滑らせて転んでしまったの。今、動けなくて。」

と小さい声で返事が返ってきたのだ。

そのとき私は（早く助けないと）という焦るような緊張した気持ちでいっぱいになった。

「動けますか？」

と聞くと、動けるとのことだったので、おばあちゃんの腕を自分の肩にまわし、抱きかかえるようにゆっくりと立ち上がった。テレビで、人を救出するときにはたくさん声をかけると言っていたのを思い出して、夢中で、

「大丈夫ですか？ 痛くないですか？」

と、とにかく声をかけ続けた。そして、無事におばあちゃんをご家族の元まで送り届けることができた。最後に、おばあちゃんに、

「本当にありがとうございます。助かりました。」

と言われて、（ああ、役に立ててよかったな）と清々しい気持ちになった。

自分の家に帰って、さっきのできごとを思い返したときに、女子中学生がおばあちゃんを助けたなんて（すごいことをした!! 女版のヒーローになったみたい。）と思っちゃうぐらいウキウキな気分になったことを覚えている。

その2日後。家のチャイムが鳴った。ドアスコープ越しにいたのは、なんと私が手助けをしたおばあちゃんだった。私にもう一度、ちゃんとお礼を伝えたかったらしく、近くの家を一軒一軒まわって訪ねてきてくれたそう。

「あのときは本当にありがとうございます。あなたがいなかったら、私は一人でダメだったわ。あなたが私を助けてくれたこと、私はずっと忘れません。本当に、本当にありがとうございます。」

と何回も頭を下げて、改めて感謝の気持ちを伝えてくださった。そのときのおばあちゃんの、やさしく包んでくれるような声と笑顔を私は忘れられない。おばあちゃんの心の底からの「ありがとう」をもらった気がした。

こんなにも人に喜んでもらえるのかと、心の底からうれしくなった。その一方で、私のしたことはあたりまえのことであり、小さな親切自体があたりまえの世の中になればいいなとも思った。おばあちゃんを助けたときには興奮して、（すごいことをした）と思ったけれど、あの場面では、助けることは当然のことだったと思う。